

平成 25 年度学校評価書

学校名	兵庫教育大学附属小学校
-----	-------------

1 学校教育目標

人間として生きぬく力を育てる

- ・ねばり強く問いつづけ、よりよいものを創り出す子
- ・はげまし、支え合い、共に伸びる子
- ・強い心とたくましい体をつくる子

2 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
教育活動	確かな学力を形成するための取組 ・教育課程の改善や学習指導方法の工夫などにより確かな学力の形成をはかる。	「『子ども—文化—教師』をつなぐ」のテーマのもと、年間を通して、前期授業研究会、後期授業研究会、そして研究発表会と、教師は力量を高めながら児童の学力形成に尽力した。さらに一昨年度から、取り組みはじめた、基礎的基本的な学力の充実も効果が現れている。全国学力学習状況調査の結果において、知識・応用のいずれの観点でも、全国平均を大きく上回り好成績をおさめることができた。	A	
	豊かな心を育むための取組 ・全校縦割りの集団活動や道徳教育などを通して豊かな心を育むことをめざす。	行事や異学年交流を通して、豊かな心を育むことができた。昨年度の研究を踏襲し、道徳を学校教育・教科のカリキュラム要として位置づけ、道徳的価値の自覚を教育の両輪の一方と捉えて指導してきた。さらに今年度は、生徒指導部会との連携を強化し、挨拶運動や挨拶の定着のための指導方法の教員研修にも取り組み、効果を上げることができた。	A	
	健康な体を培うための取組 ・様々な体験的な活動などを通して健康な体を培うことをめざす。	体育においては、運動文化の視点から児童の実態にあった教材づくりを行い、実践することで健康な体作りを目指した。林間、臨海、耐寒訓練マラソン大会等で体力と共に強い意志力を育んだ。食生活と家庭での生活習慣を適正に保つために、家庭科や理科の授業と連携したり、保護者に対して、保健日より、給食日よりによる啓発活動を推進したりした。	A	
学校運営	組織運営 ・附属学校長がリーダーシップを発揮し、大学・学部と一体となった学校運営を行う。	校長・副校長・教務主任が常に全体を見据えた経営を心掛け、全職員共通理解のもと教育活動を展開することができた。今年度の重点的取組みとしては、会議等で事前に文書を配布し、あらかじめ目を通しておくように指示したり、開始時刻の厳守を呼びかけたりしながら、効率化を図りながら、職場の労働環境の改善を行った。	A	
	教育実習 ・大学の計画に基づき、実習生の資質・能力を高められるような実地教育を行う。	教育大学附属小学校としての教員養成の責務を教員に繰り返し説くと共に、大学からの附属学校園への評価や、教員就職率全国一位を報道する新聞記事を配布する等して教員の意欲を喚起しながら実地教育の充実を図った。	A	
	大学・附属中学校・附属幼稚園との連携・協力 ・附属学校運営会議のマネジメントのもと、大学・学部と一体となった附属学校園の連携を進める。	従前の附属学校園連携委員会・連携推進協議会に加え、研究発表会参加を教員に呼びかけて、交流の深化に努めた。附属中学校との社会科プロジェクトを継続したり、幼稚園での行事に小学校教員が友好出演したりするなどして連携を深めた。	B	幼稚園、小学校、中学校共、教員は多忙を極めており、年度当初にしっかりと計画を立て実践する必要がある。特に、附属学校園で一貫した教育方針を確立していく必要がある。
	保護者との連携協力 ・学校教育目標の達成をめざし、保護者と学校の連携を進める。	クリーン附属デー、カーニバルでは、保護者と教員が共同で作業を行い、相互の絆を深めることができた。研究発表会では、保護者ボランティアとの連携によって、接遇面でも参加者から高い評価を得ることができた。年々、PTAの協力体制のノウハウや引き継ぎが確かなものになってきており、創意工夫のある活動を推進している。ボランティアの父親で構成される「おやじの会」も児童、保護者、教員の関係づくりのために、様々なイベントの企画、校内環境の充実に積極的に尽力してくださるので、学校としても連携・協力を努めている。PTA主催のインクルーシブ教育研修会を実施した。	A	

3 分野・領域ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>表現力の育成は充実しているが、「見える学力」面では心配であるという評判を耳にすることがあったので、全国学力学習状況調査での好成績は評価できる。</p> <p>とはいえ、小学校で培われた表現力は、高校生になっても授業中に積極的に意見を言うなど自己表現につながっている。表現力の育成には、継続して取り組んでほしい。</p> <p>地域性が少ない学校なので、難しいかもしれないが、昔遊びなどを通してのお年寄りとの交流など、地域の方との交流を増やすことができれば素晴らしい。</p> <p>加東市や公立小学校の行事と附属小学校の行事とが重ならないように、できるだけ配慮してほしい。</p>
<p>研究発表会などの行事に現れているように、教員と保護者との連携がうまくできている。保護者が子どもとの行事を企画したときなどでも、教員の協力を得やすい。これらの点は大きく評価することができる。ただし、両者の間での役割分担を明確にして、相互に過度の負担をかけることのないように配慮していくことが大切である。</p> <p>幼、小、中、大の連携については、年度当初に計画を立てて実施し、次年度につながるようにしてほしい。</p> <p>労働環境の改善については、通知表等事務処理の電子化を進めるなど今後も改善を図っていく必要がある。</p>

分野・領域	評価項目（取組内容）	取組達成の状況	評価	改善の方策
研究活動	<b>大学との研究協力</b> ・大学教員と附属学校教員が研究テーマを共有し、大学・学部内の人的・物的資源の効率的活用を図る。	各教科等において共同研究を積極的に進めている。研究発表会では、助言者として10名の大学教員に指導を請うことができた。大学からの要請を受け、韓国キョンジン教育大学の学生を受け入れ授業参観と学校紹介のプレゼンテーションを行った。ドイツからの研究者の視察を受け、1年生を参観する中で、幼小のスムーズな接続についての意見交流を行った。大学からの研究要請を受け自己効力感の発達に関するアンケートを行った。インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業では、大学の専門家をアドバイザーとして継続的に招聘し指導を受けた。	A	
	<b>大学との連携体制</b> ・大学・学部の教員が研究実践の一環として附属学校で授業を担当する。また、附属学校教員が大学・学部の授業を担当する。	大学授業(リフレクション及び学部授業)を附属学校教員が担当した(国語3名、社会科3名、音1名、図工2名、初等生活1名、体育1名、英語1名)。また、4名の大学教員が本校の授業(家庭科、国語、音楽、体育)を担当した。	B	大学からの連絡も小学校の計画も年度当初からできていない傾向が見られるので、年度初めの教育計画時に具体的に設定する。
	<b>全国規模の研究協議会の開催等による地域を越えた普及・啓発</b> ・附属学校の研究成果について、地域を越えた全国規模の普及・啓発を図る。	研究発表会は、本年度、土曜日1日のみの開催で行った。県外からの参観者は減少したものの(200名)、県内からは例年より多くの参加者(350名)を得ることができた。当日は、授業参観、研究協議や出版物を通して、本校の研究成果を広めることができた。午後には、教科別分科会に加え、東京大学大学院教授田中智志先生を迎え講演会を行った。「享受の自然観」という理念が、どのように教育現場への具体へと生かされていくのかということについて多くの教唆をいただく事ができた。 そのほか、地域への本校教育の還元活動として、附小交流会を実施している。今年度は、昨年度より1領域増え、国語、社会、算数他全7教科・1領域(英語活動)で授業公開、研究協議会、実技研修、情報交換会を実施し、地域の学校の研究活動に貢献している。	A	
	<b>研究開発学校制度等への応募</b> ・文部科学省等による研究開発指定などを積極的に活用するために、今年度についても積極的な応募を行う。	インクルーシブ教育システム構築モデルスクール事業では、附属幼稚園・中学校と連絡会を持ち情報交換を行ったことには、大きな意義があった。平成26年度教育課程研究指定校事業に国語科と算数科が応募を行った(審査中)。平成26年度科学研究費補助金事業(奨励研究)に英語活動で応募を行った(審査中)。	A	
安全管理等	<b>防災教育</b> ・実践的な態度や能力を育てる防災教育の推進を行う。	担当教員を中心に計画的に防災訓練を実施し、児童の実践的防災能力を高めた。 1学期：幼稚園との合同訓練による不審者対応、2学期：火災、3学期：地震	A	
	<b>健康・安全教育</b> ・生命を尊重する健康教育と安全教育の推進を行う。	健康・安全については、栄養教諭、養護教諭を中心に担任の協力を得ながら、それぞれの立場から継続的に指導を行っている。今年度は、特に「いじめ」については、対応組織を立ち上げると共に、アンケートを採ったり、各学級でケースに応じて指導したりしながら、児童が安心して学校生活をおくれる環境作りに努力した。	A	
	<b>施設設備</b> ・児童の学校生活の場にふさわしい施設設備を整える。	遊具及び教室の施設・備品について、定期的に安全点検を行い、適宜補習や危険回避措置を講じた。改修計画を立て具体的な整備を推進している。	A	
	<b>安全管理</b> ・児童にとって安全・安心な環境を整える。	公共の乗り物の使用マナーについては、年々改善が見られており苦情も少なくなってきた。定期的に、バス停、駅まで教員が同行しながら、指導を継続した。廊下を走っている児童について全校的な指導を行い、安全面への意識化を図った。気象警報発令時の安全な下校のためにメールなどを活用する仕組みを整えた。	A	

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
<p>本年度の研究発表会も充実したものであった。保護者として研究発表会に関わり、最後まで授業を参観することができたが、導入・展開・結末の授業の流れや教員の授業の工夫などがよく分かって参考になった。保護者が研究発表会に関わる機会があることによって学校運営面での効果も期待できる。大学との連携は、年度当初に計画を立てて、進めていくべきである。</p>
<p>行事等で保護者が使用する駐車場のマナーが悪く危険である。学校と保護者が協力して、今後ともマナー向上をはかっていく必要がある。 三校園での行事が重なって、駐車場がいっぱいになって困ることがあったので、校園間で行事の調整を行ってほしい。 「いじめ対応」については、機会を捉えて学校の取り組みを紹介していくべきである。</p>